



一貫コース通信

勝っても涙、負けても涙

第2回目の東京オリンピックが終わり、現在はパラリンピック競技が盛り上がりを見せている。私は1回目のオリンピックを小学6年生の時に見ているので、今回の競技の合間に当時の映像が映し出される度に、ああそうだったな…等と思いながら、観戦させて戴いた。勿論、様々な競技で戦った全世界のアスリートには、ただただ感謝の言葉以外の感慨は見つからない。ありがたい言葉しか無いのだと思うのだ。

それにしても、戦いの後には必ず勝者と敗者が出るのが勝負の世界だ。またそこには必ず勝者の涙と、敗れた者の流す涙が付き纏う。思わず引き込まれて、込み上げる事もシバシバなのだが、涙の真意は当事者のみしか理解できないものだと思う。実のところ、私は、選手表情に着目して競技を観ていたが、こんな事が出来るのは、昨今の高度な映像技術と配信する技術者のお陰だと思う。では、何故、表情なのか…。私には、瞬間に現れる表情こそが、その人が持つ本音の現れ、本気だと解るからである。闘志と言っていいかも知れない。人は、勝負どころで、これが無いと勝てると思わないし、その僅差が勝敗を分けると信じるからだ。

ところで、アスリートの発する言葉は、なんでこんなに説得力を持って、私達の心に届くのだろうか？ 同じセリフを口にしても、私達が話すときとは比べようもない。同じ言葉なのに、異なるモノは何か…？ いうに及ばず、そのヒトが持つ背景なのだと思うのだ。今般、耳にした言葉を拾って見ると、“努力は…結果を裏切らない” “ここまで支えてくれた、皆(みんな)のお陰” 等々…で、概ね類型に当てはまるスピーチが殆どだ。果たして今回の東京オリンピックで残る言葉は何だろう…？ 正直、今のところ見当たらない。本来、言葉の利点は残る事だが、もしかして、これが彼等の本音の吐露を妨げて居るのかも知れない。

話題を変えよう。私は、元々、人のアビリティや状況等の平等性には、いささか懐疑的である。今般の祭典も、205もの邦と地域のアスリートが、皆平等な環境の中で鍛えあげ、ここまで這い上がった筈などない。邦の成り立ちや現況も異なる筈で、情勢不安な所も少なくない筈だ。恰も、開会式当日の国旗の多様性がその事を暗示している様に。



物事の事象は見方によってはすごく解り易い。平易に言うと Input と Output は、ほぼ同質なのだと思うのだ。努力⇌結果で在って、前者は中々目に触れないけれど、逆転する事は余程のギャンブルで無い限り在り得ない。この、見えない練習で、競うライバルと凌ぎを削り、更に努力を重ねたモノが勝負を制するに違いない。涙は(液体だが)その結晶だと思うのだ。臆面もなく観衆の面前で流される涙には、勝者のモノと敗者のモノがある。また、見えない所でも、支えたコーチ・家族等の沢山の涙が在る筈だ。結びに、私が知っている最も短い詩に… 『 なみだは、世界中で最も小さな海です。 』 (谷川 俊太郎) が在る。